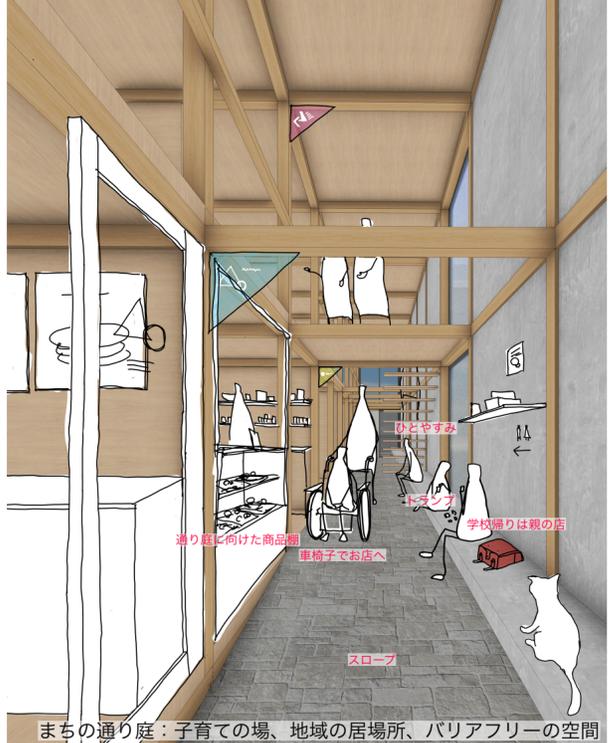




「はみだし通り庭」と「はみだし板の間」：個々の店舗が共用空間にはみ出すことで市場のような活気をつくる



まちの通り庭：子育ての場、地域の居場所、バリアフリーの空間



もちいどの庭とシェアキッチン：キッチンの開放により庭での活動の幅が広がる



前庭：もちいどの商店街の軒下

# まちを繋ぐ2つの通り庭

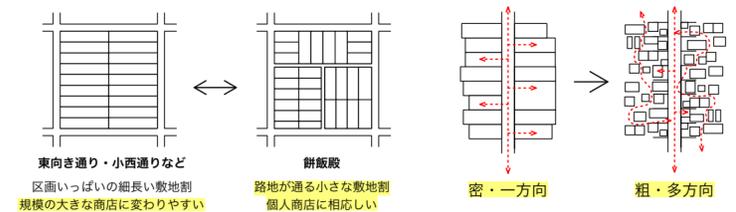
「通り庭」と「立体木格子」によって商店街を豊かな繋がり集合として更新していく提案はみ出ししろのある開いたテナント区画によって、大きなつながりの一部として店舗を連関

## ■密から粗へ。一方向から多方向で錯綜する商店街を目指します

メイン通りに面した一面的で抜けない密な商店街から、粗で抜けがあり錯綜する商店街を目指します。人口が減り、価値感が多様となる中で、個人が集まる、豊かな余白を持った抜けと繋がりのある魅力的な街となるよう共有（シェア）の考えを取り入れます

### 条坊制から生まれたもちいどの商店街の個性

### 敷地割の個性を生かしたシェアする商店街へ



## ■商店街のスケール感に合う1.82mの「もちいどのグリッド」

小さな商店の集まりが特徴的な餅飯敷のスケール感に合わせた1.82mのグリッドを採用します。将来グリッドを増やして増床していくことも可能です。スパンの増減でコストコントロールが容易になります。

■可変性  
区画割の変更や用途を変えるなどの可変性があります。ニーズの変化など将来の変更に容易に対応することが可能です。

■循環性  
間仕切りや建具などを、ビスやボルト留めなど乾式での固定にすることで移動や他区画での転用を可能にします。また、部品のストック場を設け、新規出店者が利用したり、改装に使用できるようにします。

■経済性  
スパン1.82m、高さ2.2mの立体グリッドで、柱と梁を105度で揃えた構造とします。間仕切りや建具も小さく規格化が可能、2階建の高さは一般的な1.5層分程度、プレースを用いた耐力壁の在来工法とし施工費を抑えます。

■施工性  
搬入路の狭さに配慮し、短尺、小径材や軽量の材料を用いた計画とします。建て方は大型のクレーンを使わずにすることが可能です。家具や什器についても、部品で搬入し現地で組み立てるなどの配慮をします。

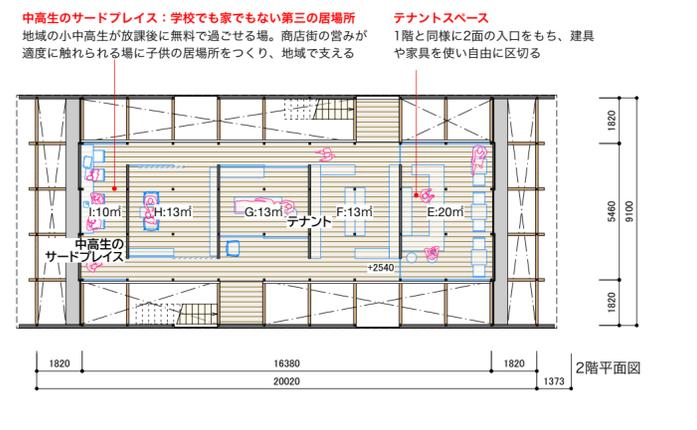
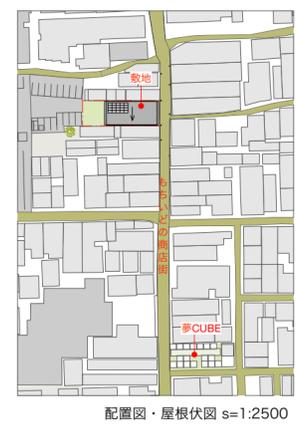
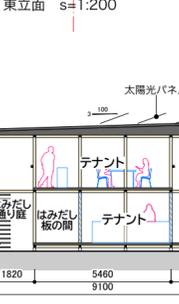
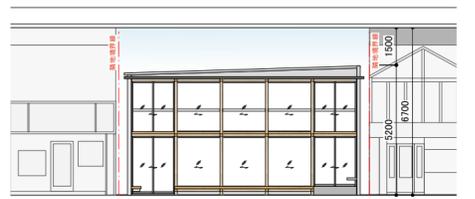
■地域性  
日本の伝統的な量の間のスケールの空間体験ができます。奈良県産の桧や特産の蚊帳生地を使い、空間の骨格を作ります。

■はみだし板の間・通り庭が生む賑わいと繋がり平面計画  
スタートアップ段階の個人が互いに助け合い、商いを軌道に乗せる仕掛けとして、屋内の共用部である「通り庭」を店舗の延長として充実させ、皆で賑わいをつくり出します

■まちのシェアキッチン [mochi K]  
商店街が運営するみんなのキッチン。期間限定のポップアップストアや時間貸しのシェアキッチン、食イベントの拠点。災害時には西駐車場まで含めた炊き出し場にもなります。小さな飲食店を始める一歩や、まちの人々が気軽に利用できる大きなパーティキッチン、子ども食堂など、人が集まり賑わうきっかけを作ります

■災害時の拠点、まちの拠所「もちいどの庭」  
防災倉庫の他、かまどベンチ、井戸、もちいどのキッチンを設置し、非常時備品の配給やキッチンを利用した炊き出しなど、災害時の拠点として利用できます。商いの場所であると同時に、社会的、文化的な場を目指します。雨水タンクの水を植栽の水やりに利用し、太陽光発電システム+蓄電池、EV-V2Hで非常用電源を確保します。

<b>建築概要</b>	構造規模 木造2階建 在来工法	<b>仕上げ</b>	屋根：折板葺、断熱材、構造用合板
敷地面積 312.55㎡	建築面積 182.18㎡ (軒下含む)	外壁：サイディング張(防火構造)、断熱材、構造用合板	外部開口部：1階木製建具、2階一部アルミ防火設備
延床面積 283.73㎡ (85.8坪)	2F: 101.55㎡	<b>概算検討</b>	85.8坪×93.2万円/坪=8000万円
テナント面積	<b>想定賃料</b>		
1F 20m×3+はみだし通り庭	7万×3=21万円/月		
10m×1+はみだし通り庭	6万×1=6万円/月		
2F 20m×1	7万×1=7万円/月		
13m×3	4万×3=12万円/月		
10m×1 (サードプレイス)	0万×1=0万円/月		
	賃料 計46万円/月	*シェアキッチン賃料別途	



## ■地域と商店街をつなぐ「公共化した通り庭」を提案します

伝統的な住まいの中で、炊事や土間利用として育まれてきた「通り庭」を街に開き、通り庭を介したまちの繋がりをつくり出します。半屋外的な内部空間である通り庭は、そこにある小さなお店の「はみ出ししろ」であると同時に、日々立ち寄れる公共的なまちの余白となります。余白は観光客だけでなく、地域の人々にとっても豊かな日常のための場となります。また、他に同様の建築が生まれることで、もちいどの商店街が通り庭を介した多孔質な深みのある町になることを目指します。

## ■抜けと回遊性をつくる「二つの通り庭」をつくります

2軒分の広い開口をもつこの敷地には「2つの通り庭」をつくります。ひとつは市場のような動的な場、ひとつは少し落ち着いた地域の場とし、テナント区画は小さいながらも抜けのある大きな空間となります。訪問者は路地を歩くような自由な散策ができ、テナントにも2つの入口ができることで来客が増えます。

## ■「余白としての通り庭」で育児と起業の両立を支えます

「通り庭」や「庭」など用途が限定されない余白は、昔ながらの職住近接的な就業を支えることができると考えます。子供を見守りながらの職場、放課後の子供達の居場所として、積極的に余白をつくることこれからの暮らしの多様性を許容します。段差のない「まちの通り庭」は多様な人々にまちに受け入れ、地域の人々の居場所となります。

